

第九回 最初の竹山の日々(二)

そんな竹山の日々は、たいへんなことばかりではなかった。

当初の作業小屋のイメージが残っているのは、玄関から入ってすぐの八畳ほどの土間だけだが、そこに薪ストーブをおいた。それもオーブン付きで料理ができる。窯開きは十二月三十日で丸鶏と芋を焼いてみたが、これがなんとも程よい火の通り具合で美味しかった。窓から外を見ると木々の枝ひとつひとつに新雪がのり一面真っ白な世界が広がる。土間には薪ストーブの炎がオレンジ色の光をゆらゆらと落とす。そんな風景に浸りながらワインと鶏肉を味わう時間がゆっくり流れる。

翌日の大晦日には、くるみ入りのパンを焼き、またワインをおともに豚肉のソテーと野菜を煮込んだスープで、はじめての竹山での年越しをした。

年が明けてもすぐ帰る気にはならず、長めの正月休みをとって九日まで竹山にすることにした。

年末から雪混じりの日が続いてきたが、二日になってようやく暖かな日差しが訪れた。それを待っていたかのように小鳥があちこちの枝を行き来しはじめ、雪原をエゾリスが横断するのを目にすることができた。小鳥たちはせわしなく飛び回るので、その種類を見分けることは難しかったが買ったばかりの鳥類図鑑と双眼鏡を駆使して、コガラとカケスとアカゲラは何とかわかった。今から見るとコガラとしたのはハシブトガラではなかったかと思うが、まあ、そのような間違えはその後山のようにある。

鳥はまだまだだが、木となるとさっぱりである。これは絶対に間違いないと言いつけるのはシラカバぐらいで、あとは、小さな木と大きな木ぐらいの見分けしかできない。私でもわかる木は庭木か街路樹に使われる木で、そのような木はほとんど見かけないのだ。それに、葉を落とした冬であればなおさらだった。それでも、風が通り道にあたった枝からサラサラとした雪の小さな雪崩が舞い散る姿は見ていて飽きなかった。それはまるで誰かがいたずらして枝をゆすって雪を舞わせているようで、それも気まぐれに、あちらの枝、こちらの枝と目の前の雪原を遊び歩いているようだった。

風といえば、北風なら北風で、一方向から吹き続けるイメージがあったが、ここではそうではない。まるで意思をもった生き物のように不連続に動き回るのである。これが春になって草木に葉が繁ようになるともっと不思議な風に出会える。本当にひとつの葉っぱだけが、まるで手を振っているように激しく動くのである。他の葉は微動だにしないのに。

朝起きて雪原を見ると、家の近くまで動物の足跡が残っていることもあった。当時は足跡で誰が来たのかなんてわかるはずもなかったが、足跡を見ただけでちよっと興奮していたのを思い出す。

近くのゴミステーションといっても家からは五百メートル離れていてそれも坂道なのだが、買ったばかりのソリにゴミをのせて、帰りには自分たちが乗って滑り降りる。そんなことをしていたらあっという間に帰るときになった。

